



## あわや緊急停止手配!? またしても営業列車の安全運行を阻害しかねない事象が発生!

8月3日、京浜東北線の運転士は南行列車にて南浦和駅を発車すると『さいたま運転区庁舎脇にある踏切付近』にて社員が大きく手を振っているのを発見しました。

何事かと驚き、運転士は非常停止手配を取ろうと減速しましたが「踏切の遮断が取れており、異常があれば踏切支障報知装置を扱っているよな?」と思い徐行したまま近づくと、小さなお子さまを含め保護具(ヘルメットや反射ベストなど)を着用した社外の方が多く見受けられ、何らかのイベントが開催されていると気が付き、そのまま運転を継続しました。

運転士は後日「お子さま向けお仕事体験イベント」が開催されていた情報を知得しましたが、乗務当日は職場の乗務点呼等でそのようなイベントがある事は周知されていませんでした。

入社以降、大きく手を振る動作は、研修や訓練にて列車を停止させる為の手段であると教育・訓練を受けており、「今後も同様の事象が起きた際に安全運行上良くないのではないか?」と不安を感じ、管理者へ話に行ったところ以下の返答がありました。

管理者:「手を振っているのが問題なの? 踏切の外でしょ? 問題ないんじゃない?」

「子供が手を振るのはしょうがない。今後どうすれば良いのか?」

「イベントの周知は全て出来るとは限らない」

そもそも社外の方を注視し安全を確保するため引率しているにも関わらず、社員自らが率先して『営業列車に向けて大きく手を振る動作』を行う事は言語同断です。また、保護具を着用し鉄道敷地内で大きく手を振るという動作は、ホーム上や沿線で小さなお子さまが手を振る動作とは全く次元の違う話ではないでしょうか?

今後、同様の箇所でも本当に停めなくてはならない事象に遭遇した際に「またイベントで手を振っているのだろう」と正常性バイアスが働いてしまい、適切な判断や対応がとれなくなる可能性も否定できません。

この間、躊躇なく列車を停める指導・教育が繰り返し行われていますが、乗務員が列車を止められないという事象が後を絶ちません。さいたま車両センター構内では、数年前に入換信号機を冒進する事象が発生しましたが、その際には社員が両手で大きく手を振っていたにも関わらず停止手配が行えませんでした。

安全は一人ひとりが想像力を働かせ、『事故の芽』を摘み取りながら日々積み重ねていくものであり、安全運行を阻害するリスクに向き合う事のない職場風土であってはなりません。

想像力の欠如で安全性と倫理観が著しく劣化! 「想定外の危険を想像し、安全を先取る」というレベルの話ですらない!